

Title	テクニクス復活とジャズと私
Sub Title	
Author	小川, 理子(Ogawa, Michiko)
Publisher	慶應義塾大学工学部
Publication year	2015
Jtitle	人間教育講座：社会を知る自分を知る自分を育てる (2015.) ,p.8- 34
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001001-20150000-0008

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

パナソニック株式会社役員・ジャズピアニスト

小川 理子



おがわ・みちこ 一九八六年慶應義塾大学理工学部卒業後、現パナソニック（株）に入社し、音響研究所に配属。音響機器の研究開発に携わり、オーディオフラットパネルスピーカーはウイーン国立歌劇場に納入され、楽器型スピーカーはニューヨーク近代美術館の永久展示品に選定される。二〇一四年、アブライアンス社ホームエンターテインメント事業部に異動、テクニクスブランド事業を統括、二〇一五年同社役員に就任。また、三歳からクラシックピアノを学ぶかたわら、独学でジャズを習得。在学中に演奏活動を開始。パナソニック入社後は一九九三年からニューオリンズジャズドラマーである上司とともに演奏活動を再開。米国ジャズフェスティバル「International March of Jazz」に五年連続出演。二〇〇五年の愛知万博では、慶應義塾大学の村井純教授と、オランダと日本をつないだ世界初のインターネットハイビジョンライブにジャズピアニストとして参画。二〇〇六年、中山正治ジャズ大賞アマチュア部門グランプリ獲得。現在までに、自主制作含めて、一四枚のCDをリリースしている。

いくつかの異なるキャリアを積んできて

シニアの方には往年のハイファイオーディオのブランドとしてよく知られているのですが、今日いらっしやっている方々のなかで、テクニクスというブランドをご存じの方は少ないのではないのでしょうか。四五歳以下の方の場合は、全体の七〇八割の世界的シェアを占めるDJターンテーブルでよく知られています。

テクニクスは一九六五年生まれのブランドで、アナログの黄金期にハイファイデリティ (High Fidelity 原音忠実再生) で一世を風靡しました。一九八〇年代初頭までがピークだったと思うのですが、一九八二年、世界で最初のCDプレーヤーが発売され、アナログからデジタルへと革新的に世の中が変わりました。そこからデジタルオーディオの時代が始まり、アナログ一〇〇年の歴史に幕が下りたわけです。エジソンが蓄音機を発明して以来、成熟度も完成度も高い音楽を再生する技術にまで、オーディオ文化はたどりついた。そのオーディオ文化が一気にデジタルに替わったところで様変わりしていくわけですね。

一九九〇年代、アナログからCDにかわった時には、評論家の先生たちから「CDはアナログよりも音が悪いよね」と言われ続けました。もとのオーディオ信号から周波数帯域にして二〇ヘルツ、二〇キロヘルツのところ、ばつさりと切ってしまっていますし、情報をデジタル化する時にやはり間引くわけです。ですから、アナログ時代の完成度の高い素晴らしい音楽を聞いていらっしやった方にしてみると、「なんだ、このカスカスの音は」となるわけです。一九八六年、私が松下電器産業(現・

パナソニック）音響研究所に入社した当時は、どうしてこんなにデジタルの音は悪いのか、という風潮でした。音響研究所に勤務した一五年間は、デジタルオーディオの音を何とかよくしようという試みはずっとしていき、デジタルでもコンサートホールのナマの音に近い再生可能なスピーカーを開発しよう、フォーマットを研究しようと、DVDオーディオなどの規格化活動にも携わりました。

二〇〇一年、ソフトバンクの孫さんがADSL定額制を始めました。それまでの従量課金が定額制になって、インフラが一気に整い、ネットワークがらみの情報を配信し、受け取る時代になりました。音楽も映像も配信できるようになったわけです。しかし、まだインフラの通信量がとても小さいため、配信できるオーディオは圧縮されたものでしかありませんでした。当時は、圧縮した音でもいい音に聞こえるようにと、圧縮のフォーマットの音質評価などもしていました。とにかくDVDオーディオのような、デジタルの最高の音にしようという規格から、音楽配信で使うようなmp3やwav、このあたりを少し間引いたら音がどうなるかというようなことまで、マイクロからマクロなところまでさまざまな研究をやりました。

一五年間、音響研究所でやり尽して、もうそろそろやることがないかなと思っていると、まったく違うキャリアに進んで行くことになる——それが私の何十年間のキャリアです。社会に出て、企業人として何を考えて、どのように仕事と向き合って、いかに社会のなかで生きて来たのか、今日はそういうことをみなさま方にお伝えできれば嬉しいと思っています。

慶應理工学部時代

私の仕事のいわば第一期に当たるのが、音響研究所の開発部門です。その後、音響研究所はマルチメディア開発センターなどいろいろと組織の名前が変わっていききましたが、自分にとっては「音の時代」と言えます。

一九八四年、私は慶應義塾大学理工学部電気工学科の南谷先生（生体電子工学、メディカルエレクトロニクス専攻）の研究室にいました。私は、小さい頃から人間のからだの不思議さにとっても興味があり、一時は医学部に進むうかと考えたこともあります。ある時、物理の先生がしてくれた宇宙の話に、ロマンや不思議な感じを持ちました。人間のからだのなかも小宇宙だし、そういう人間を生み出した宇宙というものは不思議だとサイエンスの世界を感じたのですね。それで理工学部では、理工学と医学と人間、そして私の好きな音楽が融合して研究できるようなテーマはないかと思つて探していました。そんな時にお話を聞いたのが南谷先生でした。先生は、人間が目でものを見た時に、脳がどう働くのかなど、生体電子工学についていろいろなテーマでお話をされました。たとえば、がんの治療で温熱療法をするシステムや、障害を持った方がラクに歩ける歩行器とはどういうものかという人工歩行器の研究をなさっていた。そういうお話を聞かせていただいて、すごくおもしろいなあ、ここなら私も聴覚についての研究ができるのではないかと思つて南谷研究室を尋ねたのです。先生に私はこういう研究をしたいと言ったら、「うーん、残念ながら聴覚の研究設備はうちの研究室にはないから。でも、君がそんなに音楽を好きなら、生体リズムという卒論のテーマがあるので、医学部の先生と一緒に

にやりますか？」とおっしゃって下さいました。音楽をかたちづくるものに、リズムとハーモニーとメロディの三要素があり、リズムはそのひとつですから、とてもおもしろそうだと思って、その研究室に入りました。そして、人間のからだのなかの生体リズムがどんな刺激と相関し合っているのかを、先輩と一緒に埼玉大学の医学部病院に行き、研究していました。

やりたいことにこだわって就職

そして就職です。やはり私は音楽が好きだし、大学時代に勉強したこともいかしたい。その両方の分野で何かおもしろい研究をしている企業の研究所はないかと思い、同じ学生マンションに住んでいた友人と二人で、「音響なんておもしろいんじゃないの？」と話していました。そして矢上の図書館で音響学会誌をくまなく探して見つけたのが松下電器産業株式会社音響研究所というところでした。当時、とてもおもしろい音質評価や音響心理などの研究をしていました。本当におもしろそうだし、絶対にここに行きたいと思って、南谷先生にその旨をお話したところ、「そうか。僕の慶應の同期の友だちが、その会社のオーディオ事業でいろいろな商品開発をしているから、その人のところで話を聞いてみなさい」と言われました。

大学四年の春でしたか、早速その方に話を聞きに行きました。「私は絶対にオーディオをやりたいんです」と、目をきらきらと輝かせて、夢いっぱい語ったのですが、その方はひと言「きみ、これからはオーディオの時代じゃないから、やめたほうがいいよ」と言われました（笑）。一九八五年ぐ

らいです。オーディオがデジタルの波に飲まれた時代です。さらに、どちらかというと言響よりも映像にスポットが当たって、パナソニックもテレビまっしぐらに進み始めたころです。そう言われて本場にシヨックで、当時の松下電器のオーディオ事業所から最寄りの駅まで泣く泣く帰ったのを今でもよく覚えています。どうでしょうか。私はどういう仕事をするべきなのだろうか。でもやはり初心を貫き通そうと思って、人事の面談などチャンスがある時に行っては「私はオーディオをやりたいんです」「音響をやりたいんです」とずっと言い続けました。そうするとラッキーなことに入社が叶い、音響研究所に配属されました。

第一期／音響研究所開発部門

音響研究所時代、私が新入社員の時に開発したもののひとつがホルンのような楽器型のスピーカーです。当時は、スピーカーは真っ黒で四角い箱ものしかなく、どうしてなのだろうかと思ったわけです。私は音楽好きでしたから、楽器のように、個性豊かで、しかもいい音がるスピーカーが欲しいと、技術陣と一緒に、コンピュータシミュレーションで作り出した造形でした。これはまったく売れませんでした。ただニューヨーク近代美術館の永久展示品に選ばれたことだけが、今となってはいい思い出になっています。

ウィーン国立オペラ劇場に納入した二メートル×二メートル、厚さ五センチの薄型の大きなスピーカーも世界初のものでした。当時、映像系では薄型カラーフラットパネルの開発が進んでいました。今

でこそ薄型テレビは当たり前になりましたが、一九八〇年代はまだまだブラウン管テレビの時代で、この先、テレビはどんどん薄型になっていくという研究を隣でやっています。ならばオーディオも薄型になるべきだろうと、コンサートホールのような本場にすばらしい音がなる、薄型スピーカーを開発しました。オペラの歌手がリハーサルをする時に、毎回オーケストラを雇うわけにはいきません。オーケストラと同じような音がなるものをリハーサル用に納入させていただきました。そのほか、カーオーディオや音場制御などもやりました。

DVDオーディオ研究の仕事へ

そこから、私の人生にはいろいろなことが起こってきます。

音響研究所の上司は何とニューオリンズジャズのドラマーでした。それも単なるアマチュアのドラマーではなくて、ニューオリンズの名誉市民にもなっていて、ニューオリンズジャズの世界では第一人者という方でした。当時、音響研究所には約一五〇人の研究員がいて、あらゆる音について研究していたのですが、半分ぐらいの人たちが楽器を演奏できたと思いますし、音楽好きがたくさんいました。職場でバンド活動をしたりもしていました。本当に楽しい音響研究所時代でした。一九八六年から九三年までの七年間は楽しくて、朝の七時ぐらいから夜の一二時ぐらいまでちやくちやに仕事をしていました。

ところがバブルの崩壊とともに、一九九三年、組織が解散することになりました。私は三〇歳に届

こうかという時で、女性にとって三〇歳というのは大きな壁なんですよ。結婚しようかどうか、どうか、出産の年齢的な制限もあるし、この会社において、自分のやりたいことができるのだろうか、とさまざまな不安にかられました。そこで、休暇を利用して、ニューヨークに行つてジャズを聞いたり、様々なカルチャーに触れて自分の行く先を考えて、でもやはりもう一度初心を貫こうと心を決めました。そして九三年から、次の音の道を自分で探り当てていこうと、CDよりもさらに高音質なDVDオーディオの研究を始めたわけです。

勤めながらジャズピアノニストへの道を歩む

私は入社から九三年まで仕事しかしてなくて、それまでずっと好きでやっていた音楽もピアノもお休みしていました。それに、ピアノは趣味ぐらいで考えていて、まさか自分が会社に入つてまで音楽ができるとは思っていなかったのです。そんな時に、先ほど申し上げた上司のジャズドラマーが、「まあ、そう落ち込んでいないで、一緒に音楽でもやろうよ」と声をかけてくれたんです。その上司がとても偉いのは、ずっと自分のスタイルを変えずに、毎週土曜日、大阪の北新地でドラムを叩かれていた。へえ、仕事をしながら演奏し続ける、こういうライフスタイルがあるんだなあ、私は感心していたのですが、その方に誘われて、わたしもジャズの道に入っていくことになりました。

三歳から私はクラシックピアノをはじめました。当時、昭和三〇年代後半はほとんどの女の子がピアノを習う時代で、隣の家に住んでいた同い年の友達がピアノを習い始めたので、まだ三歳の私もや

りたいと言ったところ、母が音楽の先生をどこから見つけてきてくれたのです。その先生には家庭教師として来ていただいでいて練習していたところ、「この子はちよつと音感がよさそうなので、音楽教室に入れてあげたほうがいいのでは」と音楽教室に通うことになりました。結局、幼稚園・小学校・中学校まで、学校とは別にずつと音楽教室に通っていたのですが、そこでの基礎的なトレーニングが今でもとても役立っています。

ただ、クラシックの勉強は、教則本でメソッドがあつて、先生に「はい、次はこれをやつてきなさい」と言われた通りにやらなければいけないのです。私は先生の言った通りにすることができなくて、それよりも、父が家で毎晩かけてくれていたジャズのレコードを聞いて覚えて、独学でピアノで弾いたりしていました。スウィングやスタンダードジャズなどが好きでしたね。その当時から自分で曲をつくつたり、アドリブをしたりといったことが自然にできていましたので、たぶん私はもともとジャズ向きの人間だったのかなと思います。それが音楽との出会いです。

クラシックやジャズだけでなく、フォークからロックまでいろいろな音楽を聴きました。二歳上の兄がロック好きだったので、ロックも聞きましたし、年上の従兄弟のお兄さんたちがビートルズをはじめとしたレコードをくれましたので、さまざまなジャンルの音楽を聞いて育ちました。そして慶應大学時代には、理工学部で同じクラスになった男の子たちとバンドを組んでいました。今は「クロスオーバー」という言葉は死語になつていふところですが、いわゆるフュージョン系のクロスオーバー研究会という同好会に入つて、好きな曲をコピーしたり、オリジナル曲をつくつたり、あるいはジャズ研の人たちとジャズをやつたりという学生時代を過ごしていました。これが私の、会社とは違うシー

ンでの音楽の経験です。

話を戻しましょう。九三年に上司に誘われて音楽を始めたのですが、またのめり込みました。ただ二足のわらじをはくようになるまでにまだ時間がかかります。そうなるきっかけを与えてくれたのは、慶應理工学部のまた別の先輩です。その先輩に「君は仕事と音楽と一緒にやっているけれど、どっちも中途半端だ」と言われて、私は悔しくて、悔しくて。こんなに一生懸命にやっているのに、まだ中途半端だと言われるのか。よし、じゃあ、二つとも頑張ろうと奮起して、仕事も音楽も一生懸命にやると誓ったのです。

そして九三年から七年ぐらい一生懸命に練習をしました。大学時代は遊びでやっていましたから、ジャズをもう一度最初から勉強しようと思って、上司のニューオリンズジャズドラマーにジャズのルーツはニューオリンズジャズであると教わり、ニューオリンズで生まれた一八八〇年代のラグタイムというピアノの初期のスタイルから勉強しなめたのです。クラシックは、バッハ、モーツァルト、ベートーベンから、シヨパン、リスト、さまざまな現代音楽まで勉強するのですが、ジャズの場合、体系的に一〇〇年間の歴史を勉強するという機会がなかなかありません。私はニューオリンズジャズの上司に出会って、ジャズのルーツから勉強することによって、一九一〇年代のニューヨークのハーレムで生まれたニューヨークハーレムストライドスタイルというピアノスタイルに出会うことができました。これがものすごくおもしろくて、そこにのめり込み、自分なりのスタイルをつくりあげてきました。

そして二〇〇一年、フロリダのジャズフェスティバルに行った時に、ArborsRecordsが招聘してい

る、いろいろなジャズミュージシャンの方々と楽しく演奏させていただきました。さらにその時にプロデューサーからレコーディングしないかと誘われて、レコーディングしたCDが、イギリスの「*Journal International*」の批評家投票で一位に輝きました。本当に夢のような経験をさせていただきました。

インターネット事業部門に転属

さて、DVDオーディオを手がけた後、私はインターネットの事業部門に異動することになりました。慶應の理工学部の先輩でもある人に、「通信の世界で通信技術をよくわかっている技術屋はたくさんいるけれど、コンテンツ、特に音楽のコンテンツをどういう品質で配信したらいいかわかっている人がいない。どうかインターネット事業部門に来てほしい」と言われました。私も一五年間ずっと音の仕事ばかりやっていましたから、新しいことに挑戦しようと、二〇〇一年に転勤します。

この部署ではいろいろな学びがありました。慶應の村井純先生と一緒に、二〇〇五年の愛知万博で、名古屋の万博会場とオランダのライデン大学とをつないで、世界で初めてのハイビジョン品質の音楽ライブをやりました。オランダ側に私の友人のバイオリニストがいて、名古屋の万博会場に私とほかのミュージシャンがいて、同時にライブをするので、やはり地球半周分音がずれるんですね。そのずれをどうやって解消するかということで、村井純先生が開発した「インターネットメトロノーム」に合わせて両者が演奏して、名古屋の万博会場でハイビジョン品質のライブが見事にできました。これも本当におもしろい思い出です。

今度はCSR部門の責任者

ネットワークサービス事業をずっとやっていたのですが、ネットサービスだけではなかなか儲かりません。それはそうです。パナソニックのような、ものづくりをする超固い企業で、かたやネットサービスですから、ビジネスモデルがまったく違います。ネットサービスだけでは事業にならないので、この組織は解散したほうがいいのではないかと、また解散の憂き目にあいました。次は、CSRの社会貢献部門の責任者になることになり、みっちり六年間CSRを手がけることになりました。

企業は、その事業を通じて社会に貢献することが経営理念ですが、ものづくり以外のところでも社会に関係しています。いかに企業が社会に深く広く貢献しているか、二〇〇八年にCSR部門に行つて初めて、私は学びました。このことは一般の社員もまったく知らないことだと思います。

以前の日本の企業では社会貢献は「陰徳」、つまり隠れてする徳であり、自分たちが社会貢献していることを言わなくても、当たり前に行うことだと言われていました。そこに、欧米からCSRという言葉と概念が合理的な感じが入ってきたわけです。結局言っていることは同じで、自分たちの事業を通じて社会に貢献することなのですが、寄付や寄贈といった一九六〇年代、七〇年代の社会貢献の考え方から一歩進んで、事業を通じてCSRをやっていくという考え方を積極的に発信して、私たちがそういう活動を進めていました。

アフリカやアジアの無電化地域を回る

どんなCSRを手がけたのか、少しご紹介しましょう。

二〇〇八年から一四年三月まで、無電化地域にソーラーを届けようというプロジェクトを立ち上げてやっていました。アジアでも、ミャンマーやインド、カンボジアなど無電化地域はたくさんあります。何億人という人たちが電気のない暮らしをしているわけです。そういったアジアの地にもソーラーを持っていきましたが、世界で最も遠いところに行つたのがタンザニアです。

タンザニアの首都ダルエスサラームからさらに六〇〇キロメートルのところにある村に、小さなセーナで飛んで行きました。この村は国連が開発を指定しているぐらいの無電化地域なのですが、そこにソーラーとコンテナを持って、エンジンニアたちと行きました。エンジンニアも連れて行つたのは、現地のエンジンニアにインストールのしかたを指導するためです。サバンナの中、トラックを延々と走らせて行き、小学校の横の空き地に天井部分にソーラーパネルを乗せた貨物用コンテナを設置し、その村の人たちの電気をまかないます。すると子どもたちがすぐに寄って来ました。子どもたちはそれまでこんな文明の利器を見たことがないわけです。電気のないところで子どもたちは毎日を過ごしているわけですから、まるで宇宙船が空から降りて来たような、不思議そうな顔をしていました。

でもそんな子どもたちや大人たちにまじって、携帯電話を持っている人がいるんですね。パソコンもテレビも何も電化製品がないところなのに、携帯電話だけはもっている。アフリカのいたるところに中国企業が進出して、携帯のインフラをつくっているのですが、村にだいたいひとりぐらい、カー

バッテリーを使って携帯の充電をする業者さんがいます。でも、その業者さんまで歩いて三時間くらいかかったりする。ところが、ソーラーコンテナを置いてあげると、そこで携帯電話の充電ができるようになるわけです。

設置が終わってから、州知事さんと寄贈式典をしたのですが、どこからこんなにたくさんの方が湧いて来るのだらうというぐらい、三〇〇〇人ぐらいの人たちが、それも三、四時間もかけて歩いて見に来てくれました。彼らが踊りと歌で歓迎してくれたので、私はピアノでタンザニアの歌を吹いてあげました。すると彼らはまたその演奏にあわせて、歌を歌ってくれたんですね。すごく感激しました。

ソーラーシステムと一緒に、小学校の勉強用テレビと医療用のワクチンを保存する冷蔵庫を持ってきました。子どもたちはそもそもテレビの概念がわからないわけです。何かこのなかで動いているものがあると思うのでしょうか、日本人の子どもたちが映ったビデオレターを流すと、みんなきょとんとしていました。でも一カ月後には、その小学校で教育用のDVDがきちんと使われていました。本当にたくましい人間の姿を見せていただきました。

一方、冷蔵庫が一カ月後に何に使われていたか。山羊の乳を凍らせるために使われていました。すぐに腐ってしまう山羊の乳も、冷蔵庫で凍らせてアイスバーにしておけば、家族だけでなく村人たちにも分け与えることができ、いつでも少しづつ飲むことができるようになります。これを見て、人間の智慧は本当にすばらしいなと思いました。そんなふうに自分たちで考えて使ってくれていました。

ミャンマーやカンボジアなどアジア地域にはソーラーランタンを持って行きました。こうした無電化地域では、真つ暗闇のなかでロウソクの炎みたいに暗いケロシンランプだけで夜の診療をおこなったり、

夜の出産をしていたりするので、危険です。ソーラーランタンで照らすことによって、安全な医療ができるようになります。

また、カンボジアの孤児院でもソーラーランタンは歓迎されました。子どもたちは勉強がたくてしようがないのです。無電化と貧困とは結びついていて、貧困から脱却しようと思うと、勉強する必要があるので、カンボジアの無電化地域の子どもたちは小学四、五年生ぐらいで学校からドロップアウトして、家のいろいろな仕事を手伝わされるようになります。貧困の負のスパイラルから抜け出せないでいる。それが勉強し、進学し、大学まで行くと、まったく違う人生が開ける。そのことをみんながわかっているのです、誰しもが勉強したいわけです。暗闇のなか、ディーゼルエンジンなどで電気を灯して勉強しているのですが、やはり費用が高いので、たとえば夜七時で消灯になってしまえば勉強できなくなります。でもソーラーランタンがあれば、夜一時でも一二時でも自分が好きなだけ勉強できるので、子どもたちが目をキラキラ光らせて喜んで勉強しているわけです。

カンボジアでは、一五歳〜二〇歳ぐらいの若い女性たちが、いぐさを使ってカンボジアの民芸品をつくっています。日本から持って行った電動ミシンを使っています。それを動かす電気がなかったり、手元を照らす照明がなくて暗いところで作業をしていたりするわけです。ですから、目が悪くなったりする。あるいは、生産効率が悪く、品質も悪くなったりするために、海外に輸出されても歩留まりが悪くなる。この灯りを持って行って、手元を明るくしてあげたところ、きれいなソーリングができて、生産効率も上がるようになり、とてもいい事例になったと思います。

チャリティなど音楽活動も精力的にこなす

CSRの仕事をしながら音楽もやっています。二〇〇八年四月、CSRの部署に異動してすぐ、中国四川省で大地震が起きました。この時、私も初めての災害支援の仕事を経験させていただいたのですが、その支援活動がひとしきり終わって、半年後にチャリティコンサートをすることになりました。りそな銀行の合唱団の方たちと私のピアノとでコラボレーションをすることになり、その時の収益金はすべて赤十字に寄付いたしました。

どこの部署に行っても、必ず音楽がついてくるのが、私のキャラクターです。二〇〇九年には国際NGOの難民を助ける会でも演奏させていただきました。このNGOの副理事長がトランペットを吹く方で、その方と意気投合しまして、世界平和のための音楽コラボチャリティをNGOの人たちとやりました。二〇一〇年は、トルコと日本が友好を結んで一二〇周年という年で、外務省から声をかけていただき、イスタンブールでのジャズフェスティバルに日本の代表として行きました。地元の新報にも取り上げていただいて、たいへんに貴重な体験をさせていただきました。

二〇一一年一月には、国際NGOである国際日本ボランティアセンターの主催によって、チャリティコンサートをさせていただきました。南アフリカから、エイズ予防のセミナーを全世界でやっている女性がお二人来日されてきました。そのうちのおひとりを実際にHIVに感染しているのですが、毎日同じ時間に薬を飲んで、毎日自分たちが畑で育てた野菜を食べ、生命を維持しているらしいです。そして、そのことをアフリカの人たちにエデュケートしているリーダークラスの人たちです。

こうしたリーダーを育てるための資金が必要だと、全世界をまわられており、日本にもいらっしやっただけです。そこで日本でもチャリティコンサートをさせていただきます。

二〇一一年三月、東日本大震災が発生した時、宮城県女川町をはじめとした三陸の病院でお医者さんたちが、電気のないところで活動されているので、LEDライトを首から下げるネットクワイトを、NPO災害人道医療支援会（HUMA）を通じて寄付しました。それがご縁で、HUMAの設立一〇周年総会でチャリティコンサートをさせていただきます。それだけでもいいです。

テクニクス復活の大役を担う

CSRの活動をおもしろいなと思いついていたら、また突然、部署が異動になります。「はい、次はここに行きなさい」と昨年五月、テクニクスのオーディオ部門に転勤になり、今に至っております。異動時期は五月一日だったので、私が辞令を受けたのが三月末でした。つまり異動まで一カ月しかなかったんです。その一カ月間、なぜ私がこの仕事をするようになったのだろうか、私の役割はなんだろうかと一生懸命に考えました。そして、私のキャリアの全部が最初から今につながっているんだと確信にかわったのが、この時だったんです。夢一杯で入社し、新入社員からスタートして一五年間一生懸命に仕事をして、それが組織もろともなくなりました。そして映像にリソースがすべてシフトし、その第二期のネットワークも組織が解散した。その後、CSRというまったく違う勉強をさせていただきます、社会に貢献するという経営理念を自分の肌感覚で学ぶことができた——そうしたすべてが、

今つながったという感じがしたわけです。

ここから、テクニクスの話をしたいと思います。テクニクスは、パナソニックグループのなかの事業ブランドのひとつで、パナソニックとは一線を画した個別のブランドとして出しています。ですから、パナソニックとテクニクスはブランドとして並立されることはありません。ただし製造責任として、パナソニック株式会社の社名が商品に明記されています。そういった個別の事業ブランドとして初めてのブランドです。ただし、ブランド事業としては一九六五年からずっと続けており、二〇〇三年頃からハイファイオーディオとしては約一〇年間休眠しておりました。それを今回復活させることになったわけです。

復活の背景にあるのはまた再び、いい音で音楽を聞くという環境が整い始めてきたことです。ネットワークインフラがこれだけリッチになり、ハイレゾリューションの音楽コンテンツがネットワーク経由で入手できるようになった。また、シニアの方だけでなく、若い方たちもいい音が聞けるという環境になってきたところで、私たちもこれまで蓄積して来たデジタル技術やアコースティック技術などをおつける挑戦ができるのではないか。そういうことで復活したわけです。

一九六〇年代から八〇年代に出していた、いわゆるハイファイオーディオといわれる機器には、SL-1200という有名なターンテーブルも含まれています。画期的なアンプやリアフェーズのスピーカーなどを出し続けてきたテクニクスの後を継ぎ新生テクニクスとして復活するには、やはり自分たちのフィロソフィー（哲学）を決めなければいけない。私が最初にした仕事はこのフィロソフィーを決めることでした。

フィロソフィーがないと、みんな、立ち位置がわかりません。パナソニックグループにも経営理念があります。創業者の松下幸之助が経営理念をきっちりと言ってくれることによって、全世界二七万人の従業員は、どんな国籍であれ、どんな年齢であれ、どんな仕事をしようが、そこに心をひとつにして仕事をしていけるわけです。それほど経営理念には求心力がある。事業を通じて社会貢献するという事業哲学があるから、自分はこの会社で仕事をしていると思えるのです。

ですから、新生テクニクスにもフィロソフィーが必要です。さて、どんなフィロソフィーにするか。私は、音楽を愛するすべての人々に音楽の感動を提供し続ける、そして世界中の音楽文化の発展に貢献することを、テクニクスのフィロソフィーとして決めました。そして、サウンド（音）、テクノロジー（技術）、デザインの三つをフィロソフィーの三本柱として、それぞれに細かくテクニクスのブランドポリシー（テクニクス憲章）を決めていきました。たとえば音については、こういった音をめざすんだ、技術についてもあくなき探求を続けていく、デザインについてもいろいろな空間の豊かな価値を創造するためのデザインである。この三つについては絶対に妥協しないというのが私たちのフィロソフィーです。

ブランドメッセージも選定しました。Rediscover Music.というのが今回のテクニクスのブランドメッセージになります。これにどういう意味をこめたかという、私自身の反省でもあります。昔の私には、音楽をじっくりと聞いてすごく感動するという豊かな時間がありました。ところがこの一〇年はというと、時間がどんどん細切れになって、音楽という芸術文化が消耗品になってきている。音楽とは時間の芸術であり、一時間聞こうと思ったら一時間かかるわけです。その一時間さえもひねり

だすことができなようなライフスタイルになっっているなと反省しました。そしてなぜそうなっているのかと考えると、急速な情報化社会の波にのまれていい音で聞くことを忘れてるわけです。ですから、新しい環境で新しい音にもう一度出会ってほしい、いい音楽に出会ってほしい、発見してほしい。小さいころからいろいろな音楽の発見があったおかげで、今こうして豊かな音楽ライフを歩んでいますので、そういう意味も込めて、Rediscover Music. と制定しました。

私が最初に音楽に感動したのは三歳の時です。本当におませだったと思いますが、チャイコフスキーの『白鳥の湖』です。幼稚園の頃に、父親のレコードをひとりりでかけて聞いていました。皆さんにも、人生で最初に音楽に感動したのはあれだったなと思いついて体験があると思います。

二〇一四年九月、ベルリンのIFAという世界最大のエレクトロニクスショーで、テクニクスは復活宣言をしました。スピーカーとアンプ、ネットワークプレーヤーのセットで、五〇〇万円ぐらいのリファレンスクラスと、五〇万円ぐらいのプレミアムクラスの、二つのシリーズを今回出しました。

その後、アメリカにも導入しました。アメリカのコンベンションに出展していた時に、違う会場で視覚障害の方のための講演をされていたステイビー・ワンダーが、私たちの会場にふらふらと立ち寄られました。ちょうど私のブースでは音を出してたんですよ。その音につられていらつしゃって、一五分ぐらいずっと音楽を聞いて、そして商品をなでまわして、「すばらしい商品をつくってくれた！」と言ってくださいました。私は感激して、先日ステイビー・ワンダーにお礼状を出しましたが、返事が来るかどうかはわかりません（笑）。

二〇一四年八月、関西フィルハーモニーとのコンサートに出演させていただきました。同年五月にテ

クニクスを担当した後で、一番忙しい時期だったのですが、この共演は一年半前から決まっていたので、穴をあけるわけにもいきません。この時は仕事と練習を並行してするのが本当にきつかったです。毎日、夜の一時半の終電で家に帰って、朝は夜明け前に起きて、会社に出勤する前の一時間練習するという日々が続きました。この時の指揮者は藤岡幸夫さんです。藤岡さんは慶應出身者で、工学部の藤岡知夫先生のご子息で、朝倉先生の同期生でもあります。

社会に出て必要な三つの力

私の経験から皆様にお伝えしたいメッセージは、社会に出て必要な力が三つあることです。

ひとつめが「挑戦し続ける」ことです。自分の限界はだいたいわかるものですが、この限界のハードルを少しだけ上げて、そのハードルを飛び越えようとしてみましょう。それを繰り返しているのと、ある時ふと振り返ると、「すごい、こんなところまで来ている」というレベルに到達することができると思います。あまりにも、最初からどうにもならない目標を立ててしまうと、途中でくじけてしまうのですが、限界よりもちょっとだけ高くすることがポイントだと思います。

そして他流試合をすることです。私がこれに気づいたのは、最初にフロリダのジャズフェスティバルに行った時です。キラ星のようなプロのミュージシャンがたくさんいて、朝から晩まで二週間ジャズをやっているわけですが、その方々のなかにポンと入って演奏させてもらおうと、「あれ、こんなこと、これまででできなかった。ああ、こういう潜在能力が自分のなかに眠っていたんだな」と思えるように

なります。ひよっとしたらいろいろな引き出しがあつて、自分はそこのためにためているのかもしれませんが。でもそれは自分では出せなくて、人の力で出していたのかもかもしれません。言ってみれば野球のメジャーリーグ級のすごいミュージシャンたちと一緒にやってみると、自分が知らない自分が引き出されることを、その時に体験しました。ですから、若い方たちはどんどん外に出て他流試合をやってください。

二番目は、豊かに発想し（イマジネーション）、創造すること（クリエイション）です。

新入社員の頃、私は当時の所長に、特許を書けと毎日言われていました。そう言われても、発明なんてそんなにできるわけないと、心のなかで思っていたのですが、それを見透かしたように、「小川さん、世の中には、君がわかっていることよりもわからないことのほうが無限にたくさんあるんだよ。そんなタコつぼみたいなところに入っていないで、まったく違うところに点を打ってみろ」とよく言われていました。その後、社会人生活で本当に行き詰まった時に、全然違うところに点を打つことで、まったく違う化学作用が起こって、「イノベーション」というのはこういうことなのか」と経験することができました。本当に、当時の所長の言う通りだと思えます。無限の可能性があるわけです。やはり好奇心を絶やさず、いろいろなところに興味をもってください。社会人で何かを開発する時に一番大切なのは、変化のきざしを感じることです。ちよつとした兆しに気づくかどうか、感じるかどうかで、成功と失敗の道がまったく分かれます。ちよつとした兆しをうまくつかまえて、次にいかなる人は成功していると思えます。兆しをキャッチできる、感度のアンテナを高くたくさん立てておいてほしいと思います。

そのためには、バーチャルではなく、リアルな経験を積んでください。ネットワークの仕事でチームリーダーをしていた時に、同じチームでやっていたのが二、三、五歳ぐらいの若者たちだったので、みんなすべてパソコンなんですよ。音楽を聞くのもパソコンで、ある時、CDを聞かせてあげたところ、CDってこんなにいい音がしていたんですか？ とびっくりするぐらいでした。パソコンで音楽を聞いて、パソコンで新聞を読んで、自分が無人島に行くことになったら、パソコン一台あればいいですよと言ふような若者ばかりでした。彼らがどういう生活をしてたかというところ、やはり半径一メートル以内の、手の届く範囲で生活をしているわけです。「うーん、それではやはりダメだろう。もっとアンテナを立てて、自分の足でどんどん歩いて、やってよ」とアドバイスしたのですが、その通りにやってくれた人は、今、ベンチャーを起業して、有名になっています。

三つめは信念と情熱を持ち続けることです。私の場合は、音楽という自分の個性や得意分野、強みを軸にして、やめずにやってきたことが自分のバックボーンになっているんですね。たとえば今、テクニクスは欧州が主戦場ですので、欧州をはじめとした海外に行くことがとても多いのですが、そこでリスベクトしていただけることにはやはりそういうバックボーンがあると思います。ですから、どんな仕事をしても、どんな人とのコミュニケーションをしても、何らかの強みを軸にバックボーンを形成していただきたいと思います。

私はうまくいかなかったことのほうがずっと多かったのですが、うまくいかない時でも、素直な、とらわれない心で続けていけば、必ず経験が確信にかわる時が来ると思います。私が音楽をやめずに来ることができたのは、好きだったという要因以外に、どんなミュージシャンに出会っても、必ず

彼らに「keep play」、「don't stop play」と言われて、それを守ってきたからです。要するに「やめるな、続けろ」です。アメリカの一流のプロの人にもみんなに言われました。それだけは守ろうと思って、私は今でも心に刻み付けて実行していることです。

世界に羽ばたく人材に必要な七項目

最後ですが、ますます多様化しグローバルな時代に、慶應大学の学生さんたちにはぜひ世界から求められる人材になっていただきたいなと思います。チャンスはいくらでもあります。そのために必要とされる七つのキーワードをお伝えしたいと思います。

1 経験を通じてダイナミックレンジを大きくする
ダイナミックレンジとは音響のことばで、低い音から高い音、小さい音から大きい音までの幅を言います。このダイナミックレンジを大きくしてください。今、スマホでしか音楽を聞いていなかったりすると、やはりダイナミックレンジが小さいわけです。それを広げることによって、感性の幅はすごく大きくなります。私は聴覚の話を味覚の話によくたとえるのですが、毎日ファーストフードばかりを食べていると、そういう味覚になってしまいます。ある時、とてもおいしいものを食べると、「こんなにおいしいものがあった」という経験がリファレンスになって、どんどん味覚が開発されていきます。聴覚も同じなんですよ。いい音を聞けば聞くほど、聴覚は開発されるんですね。というように、ダイナミックレンジを大きくすると、感性の幅が広がって、感度やアンテナを常に張り巡らせることができるよ

うになります。

2 ものごとのバランスを知る オーディオとは個性豊かな、幅の広い産業分野です。海外のシヨールに行っても、ひとつの音をとつてもいろいろな個性豊かな音があります。私はお酒が好きなので、お酒をたよえに出しますが、ワインにしても日本酒にしても、つくる人によっていろいろかわりますよ。このお酒はびりつと辛口の大吟醸で、のどごしさわやかというものがあれば、まったく濃厚なお酒もある。音もそうなんです。本当に千差万別で、ものすごく個性豊かです。そのあたりは映像の世界とは違います。だからこそ、テクニクスも復活できたのかもかもしれません。私が見る世界と申し上げているのは、スマホの音楽だけしか知らないでいると、やはり人生で損をすると思う。スマホで便利に聞くだけでなく、片方で「こういうオーディオ機器ならこういういい音を聞ける環境が実現できるんだな」という世界も知ってほしい。そういう多様な価値観を認識したうえで、自分がこれだという選び方をしてほしいと思います。そうしたいいろいろな価値観を知らないでいるのでは、バランスが崩れます。

3 直感力(直観力)を信じる 私は新入社員の時に「音には感性が大事です！」と言い続けていたのですが、その度にこの女子社員は何を言っているんだという感じで、工業製品はすべて数値化しなさいと言われていました。私も、大学時代に生体電子工学でやっていたことを応用して、音楽を聞いた時に脳波がどう変わるか、心拍がどう変化するかというように、数値化することに努力をしていました。でもやはり数値化できない部分があるんですね。聴覚にしても脳の中でわからないことはたくさんありますから、そういったところで直感力(直観力)は絶対におろそか

にしていけません。

先日、ウィスキーの殿堂入りされた、サントリーのチーフブレンダーの興水精一さんとお話していただいて、「いいブレンドができるのはどういう時ですか?」とお聞きしましたら、「自分でブレンドして、口元に近づけた瞬間にぱっとわかります。それがいいか悪いかは、香りと、口も含んだ瞬間にわかります」とおっしゃっていました。というように、その瞬間の直感力、つまり感性の領域は大切にすべきことだと思っています。数字やバックデータというのは重要なのですが、そこばかりにとらわれてはいけなさと感じています。

4 専門性を光らせながら、全体性を把握、構築する これは技術者がよく陥る罫で、専門性を追求するばかりに、どんどんタコつぼの底に入っていくてしまい、なかなか全体が見えなくなってしまうがちです。今の技術マネジメントや技術プロデュースは、専門性がありながらも、全体を把握、構築していく力が必要とされています。今は垂直統合よりも水平分業の時代ですから、それを技術的に横展開していけるプロデュース力を高めていくことも、理工学部の学生さんにとっては必要ではないかと思っています。

5 実相実質を見抜く 出て来たデータを鵜呑みにしてはいけない、ちゃんと実相を見抜くことを本質的にやっておきなさいと、先輩からよく教えていただきました。

6 多様性を受容する これは私が女性だからではないのですが、企業が国際競争にさらされながら、グローバル競争を勝ち抜いていくなかでは、やはりお互いに多様性を受容していかなければいけないと思います。

7 日本文化（歴史、風土、芸術、宗教観 *etc.*）を理解し、伝える 多様性を受容するためには、日本人として日本文化を理解し、海外の人に伝えることがとても大事だと思います。私は一週間前にカナダにチームで行ってきました。昼間はプレゼンテーションをして、夜には地元のミュージシャンと一緒に演奏したんですね。音楽をやることはコミュニケーションをとっても円滑にします。さらに日本の曲をジャズにアレンジしたりすることで、さらにリスペクトしあえることがあるんです。あるいは、たとえばフランスに行った時にフランス人からまず聞かれたことは、日本料理のお出汁についてです。仕事とはまったく関係ないのですが、彼らはそういうところから入ってくる。歴史や風土、文化、芸術も含めて日本文化というアイデンティティをきつちりと伝えることができないと、やはりグローバルにリスペクトしあえないなとつくづく思っております。